

[資 料]

第 21 回・第 22 回 総合学術文化学会学術研究会の報告

編集：大森克徳

第 21 回総合学術文化学会学術研究会は前号発行の直前（平成 29 年 11 月 18 日）に開催されたため、平成 30 年 3 月 16 日に開催された第 22 回総合学術文化学会学術研究会と併せ、本号に研究発表概要を掲載することとした。

なお、上記 2 回の学術研究会は、いずれも尾関英正会長の開会の挨拶の後、松本賢信副会長の司会進行により進められた。

以下に発表者から提供された研究発表概要を掲載する。

第 21 回学術研究会

荒井幸康（非常勤講師）「言語にとって近代化とは何だったのか？ — ソビエト連邦の少数民族言語の事例から」

高澤美由紀（法学部准教授）「スペイン語母語話者と日本人学習者によるスペイン語の対照焦点の知覚」

第 22 回学術研究会

小竹直子（国際関係学部准教授）「留学生の交渉会話に対する日本語教師の評価」

藤村 希（経済学部准教授）「ホーソーとポーの短編作品における女性表象と男性主体 — “The Birth-mark” と “Berenice” を読む」

内丸公平（東洋大学助教）「シェイクスピアは英語教材だった！ — 中等学校英語教科書（1817-2016）におけるシェイクスピア受容の通時的考察」

第 21 回学術研究会研究発表概要

言語にとって近代化とは何だったのか？

— ソビエト連邦の少数民族言語の事例から —

荒 井 幸 康

本発表では言語における近代化に関して、その三つの側面について考察を行った。

1. 言語と国家

言語の近代化はベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』で語る通り、様々な相似の言語変種の中から言語が形成することを意味しているが、国を持たない少数民族にとって言語の「近代化」は、国家語への言語自体の「取り換え」を意味することが多い。それに対して、ソ連形成期の少数民族言語に対する政策は、その共存を目指し、その言語自体の近代化を目指した。結果的には、近代化によって、意図されたものかどうかはわからないが、少数民族言語が、ソ連の影響圏へ入ることを確実なものとした。文字はその言語を越えて、何らかの文明の影響圏を確定するものであり、その影響は言語に、高級語彙（部分的に生活語彙）として浸透していくものだからである。

2. ソ連期における、少数民族に対する文字・語彙の表す勢力圏の形成とその変更

ソ連期において、バルト三国やアルメニア、グルジアなどのキリスト教圏を除き、1920-30年代から行われた文字や語彙の少数民族言語の近代化

政策は、新たな影響圏の創設と考えることはできないだろうか？ 1920年代、ラテン文字化という形で、まず全世界を革命する方向性へと一時期向けられていくが、1930年代後半にキリル文字化に転じていくことによって、一国社会主義の境界を確定する方向が明確となり、ソ連が崩壊するまでの間、その影響圏にある少数民族の言語は文字と高級語彙の浸透を通して、ロシア語の影響下にあるといえた。

3. 独立した旧ソ連圏の諸国家における言語政策（特に文字）と勢力圏の変化

ソ連崩壊後、独立した諸国家の中にはソ連期にキリル文字化した言語かその国家語となったものがある。独立後しばらくして、ラテン文字への方向性を打ち出すことにより新たな勢力圏への参入を目指している国家があるように見える。その国家が、影響圏をどこに設定するのかは、文字の変更と同時に、これからどこから高級語彙を入れていくのかというところまである程度まで推測することは可能である。とはいえ、これからも、ソ連時代に定着した、日常語彙のいくつかはそのまま使われていく可能性があり、ソ連の勢力圏にあったインパクトは残るであろう。

なお、ロシア連邦内にとどまった少数民族に関しては、2002年12月、「ロシア連邦諸民族言語法改正法」が採択された。ロシア国内の少数民族が使用する文字はキリル文字であると規定した法律であり、文字を通じて、その勢力圏にとどまるべきことを国家が示した政策といえる。これによって、ソ連崩壊以降着々とラテン文字化を進めていたタタール語は、キリル文字勢力圏にとどまることになった。

本発表で考察したことは以上であるが、恐らく今までの国家と言語に関する様々な論考に、新たな側面を加えることが出来たと考えるものがあるとするれば、ソ連が言語政策を通じて一つの勢力圏を形成したこととそこからの離脱が同じく言語政策の側面から見えるということである。

全体的に見れば、言語政策の実体計画の側面に注目した考察であり、教育政策に関する考察が欠けているため、さらに細かい考察を教育政策の側面から考察する必要があると思われる。

スペイン語母語話者と日本人学習者による スペイン語の対照焦点の知覚

高澤美由紀

スペイン語の語順は、統語的観点からは比較的自由とされるが、情報機能の観点からは制約を受ける傾向にある。しかしながら、情報機能の観点から語順に言及する初級者向けのテキストは、極めてまれであり、初級レベルの学習者がこの観点から語順を意識的に考えることはほとんどないと言えるであろう。一方、イントネーションもまた、情報機能において重要な役割を果たすとされる。つまり、スペイン語学習者にとって、情報機能に関与するイントネーションを適切に知覚することは、コミュニケーションを円滑に行う上での助けとなると考えられる。

以上のことから、本実験では情報機能の中の対照焦点を扱い、スペイン語母語話者と日本人スペイン語学習者が発話において、その知覚のためにどんなストラテジーを用いるかについて調べることを目的としている。先行研究において、対照焦点の知覚には、*f₀* ピークの位置、持続時間、そして *f₀* の値の組み合わせが関与するという指摘はされてきたが、その組み合わせについては統一的な結果が得られていないことを踏まえ、1) 対照焦点を知覚するために用いられる *f₀* のピークの位置とその値の組み合わせはどのようになっているか、2) 対照焦点の知覚において、スペイン語母語話者と日本人学習者では違いが見られるのか、という2点について Praat で作成した刺激音を用いて聴取実験を行った。

刺激音を作成するために、まず、(1) *Lola deja la llave sobre la mesa.* (ロラは机の上に鍵を置き忘れる。)、(2) *René dejó el bebé sobre el sofá.* (レネはソファの上に赤ちゃんを置いて行った。) という12音節からなる各文が、どこにも強調が置かれない広焦点の発話、さらに、主語、動詞、目的語に

それぞれ強調が置かれる対照焦点の発話として計8発話が、イベリア半島出身のスペイン語母語話者（男性）によって録音された。(1)の文タイプは、全ての単語が後ろから2番目の音節にアクセントが置かれ、(2)の文タイプは、全ての単語が最後の音節にアクセントが置かれるものである。これらの音声进行分析した結果を参考に、広焦点で発話された*f₀*形状を主語と動詞、目的語について、(1)の文タイプでは、*f₀*ピークの位置を前に、(2)の文タイプでは、*f₀*ピークの位置を後ろに移動させたものと、*f₀*ピークの値を変化させたものの組み合わせ、各文タイプ19個ずつの刺激音を作成した。これらの刺激音に広焦点の発話を加えたそれぞれ20個の刺激音をランダムに並べ替え、サラマンカ（スペイン）在住のスペイン語母語話者37名と日本人スペイン語学習者32名に聴取してもらい、どこが強調されて発音されているかについて強制選択で回答してもらった。

その結果、スペイン語母語話者も日本人スペイン語学習者も、広焦点の発話である、*f₀*曲線がダウンステップを示す刺激音については、約50%、もしくは50%以上が強調された箇所がない、つまり、広焦点の発話として知覚するという類似の傾向を示した。さらに、(1)の文タイプにおいて、アクセントが置かれる音節に*f₀*ピークが位置し、その*f₀*ピーク値がその他の単語の*f₀*ピーク値と同じ、もしくは大きい場合、その単語が強調されていると知覚する傾向が、スペイン語母語話者、日本人スペイン語学習者どちらのグループにも見られた。一方で、(2)の文タイプにおいて、Renéとdejóの*f₀*ピーク値が等しい場合、スペイン語母語話者はdejóに強調があると聴取するが、日本人スペイン語学習者はどこにも強調がないと聴取する傾向が見られた。以上の結果から、スペイン語母語話者は、対照焦点を知覚するために、*f₀*ピークの値とその位置を用いると推測され、また、日本人スペイン語学習者は、スペイン語母語話者よりも*f₀*値をセンシティブに聴取する傾向があるのではないかと推測された。

第 22 回学術研究会研究発表概要

留学生の交渉会話に対する日本語教師の評価

小 竹 直 子

近年日本語教育では、「日本語を使って何ができるか」によって日本語学習者の日本語習熟度を測る考え方が主流となっている。しかし、特に対話においては「できる」という判断に対話の相手が協力的かどうかなどの外的要素が関係し、言語能力の判定には慎重を要する。また、中・上級レベルの学習者の場合、目的を達成できるかどうかだけでは十分ではなく、対話の相手に好印象を与える話し方ができたか、悪印象を残す話し方ではなかったかも重要な要素である。

本発表では、「交渉会話」のロールプレイを録音したデータに基づき、日本語力、交渉力とともに印象よくできたかどうかを日本語教師に評価してもらった結果を報告しつつ、交渉力はあっても相手に良い印象を持たれない場合があることを指摘した。そして、効果的な交渉とはどのようなもので、どのように指導すべきかを考察し、発表者なりの日本語教育への提言を行った。以下、発表の流れに沿って、概要を報告する。

まず、なぜ交渉を本研究でとりあげるのかを以下のように説明した。すなわち、冒頭で述べた日本語能力を測る尺度の問題を検討する上で交渉は格好の題材となるからである。それは、交渉では、交渉そのものを進める力と交渉相手に好感を持たれるか否かという二つの要素が目的達成に関わっており、かつその二つを分けて評価できるからである。とりわけ、日本人は交渉においてロジカルな議論よりも交渉相手との人間関係の構築を重視すると先行研究で指摘されている (Moran, 1985)。だとすれば、「交渉で

きる」能力は、少なくとも日本社会においては人間関係を構築する能力であると言え、「交渉できる」かどうかを測ることは日本語で人間関係を構築する能力を有しているかを測ることになるのである。留学生を社会に送り出す立場にある大学における日本語教育にとって非常に意義のあるテーマだと言える。

そこで本研究の目的は次の3点にまとめられる。すなわち第一に、中・上級レベルの日本語学習者は相手に悪印象を与えずに交渉することができるかどうかを確かめること、第二に、交渉を成功させるにはどのような能力・スキルが必要か記述すること、第三にこれらの観察から言えることとして、日本語教育に対して提言を行うことの3点である。

次に、それらの目的を達する方法として行った調査の概要について報告する。まず、中・上級レベルの日本語学習者だと考えられる学部留学生3名（以下、留学生A、B、Cと呼称する）に協力してもらい、交渉場面のロールプレイを実施し、それを録音した。具体的には、寝坊して必修科目の試験が受けられなかった学生役になり、教学課の職員に事情を話して、何らかのほかに方法で単位を認めてもらうために交渉を行うというものである。ロールプレイの指示文を書いたロールカードには、その日大雪が降っていた、バスが遅れてきた、などの不可抗力の事情も併せて記載し、それらを上手く使って交渉を進められるようにしておいた。また、拒否されても簡単に諦めず、粘り強く交渉を続けるようにとの指示を加えた。一方、教学課の職員役は報告者自身が行い、いかなる学生役の要求も退け、来年度もう一度履修し直すように説得する役目に徹した。このようにして録音された交渉会話を10年以上の教授経験を持つ日本語教師5名に次のような観点から5段階評価で評価してもらった。すなわち、①文法、②発音、③語彙、④流暢さといった狭い意味での言語能力の評価に加え、⑤適切な対人配慮を行ったかどうか、⑥交渉力は高いと思うか、⑦交渉を進める上での有効な手段を用いていたか、そして⑧全体にこの学生に対して好印象を持てるかどうかという8項目である。これらの評価項目は喬（2015:69）

の先行研究から一部を援用したものである。

このようにして得られた評価点を基に分析を行った。まず交渉力で最も高い評価点を得たのは留学生 B、次に留学生 A、留学生 C は最低点の評価、すなわち全員の日本語教師が 1 をつけた 5 点という評価点がつけられた。留学生 C は、事前の指示において粘り強く交渉を続けるように強調されていたにもかかわらず、一度拒否されると、「はい、わかりました」と簡単に引き下がってしまったため、交渉力という面では低い評価を受けたと考えられる。しかし興味深いことに、⑧印象評価においては、留学生 C は A に次ぐ 2 番目、B が 3 番目であった。つまり、最も交渉力の高い B が印象評価においては最も低く評価されてしまい、あっさり引き下がってしまった C のほうが印象が良くなってしまったということになる。これにより、「交渉ができる」か否かを会話能力の尺度とする場合の問題点が浮き彫りになる。つまり、実際には相手に悪印象を残してしまう話し方であっても、交渉の目的を達成していた場合、会話力を高く評価してしまう可能性があるのである。「交渉できる」能力を表面的に見るとそうなるため、交渉力とは何か、慎重な判断を要することを本調査の結果は示唆している。

そこで、なぜ留学生 B は印象評価において低く評価されたのか。留学生 B 自身のフォローアップ・インタビューや日本語教師の自由記述欄へのコメントから原因として考えられるのは、まず留学生 B が笑いながら話している場面が見られたことである。これは本人自身が「笑うのはよくなかった」と振り返るように、「反省していない」「真剣味が感じられない」という否定的な印象につながってしまったと考えられる。留学生 B は普段から日本語力の低さを笑いでカバーするかのようによく日本語で話すとき笑い声を出してしまうことがある。笑い声は明るい印象を与え、好印象につながる場合もあるが、今回のロールプレイでは状況にそぐわなかった結果、印象評価が低くなってしまった。「笑う」という一種のコミュニケーション・ストラテジーがマイナスに働いてしまったと言える。

また、複数の日本語教師が指摘していることだが、留学生 B は一方的に自分の要求を主張するばかりで、妥協する姿勢が認められなかった。それと対照的に、留学生 A は「減点でもいいので…（単位は認めてほしい）」と述べるなど、妥協案を示している点を複数の日本語教師が高く評価している。このことから、日本人との交渉においては、自分の主張を展開するだけでなく、自分の非を認めて妥協する態度を見せることも重要な方略であると考えられる。

以上の調査結果の考察から、本発表において日本語教育へ以下のような提言を行った。第一に、交渉能力を日本語能力を測る尺度とする場合、単に交渉の目的が達成されたかどうかだけでなく、交渉相手に悪印象を与えていないか、慎重に判断する必要があることを提言した。近年、知識量よりも運用力で日本語習熟度を測る考え方は主流となっているが、しかし対話の場合は、単に目的を達するための運用力では実際には通用しないことを我々日本語教師は知るべきである。第二に、普段から相手に与える印象という観点から、留学生指導にあたる必要があることを提言した。留学生 B のように、特に若年の日本語学習者は自らの日本語能力の低さをカバーするために「笑い」や、人によっては「なんかー」のような若者らしいフィラーを使う人もいる。それが常にプラスに働くとは限らず、対話相手や状況によって悪印象を与えてしまうことになることを日本語学習者によく知ってもらう必要がある。第三に、日本人との交渉の場面では、自分の要求ばかり主張するのは得策ではないことを日本語学習者に知ってもらうべきことを提言した。日本人との交渉では、一歩引いて妥協案を示しつつ、自分の主張を通す方法が理想的であると言える。このような交渉のパターンは、ビジネス日本語教育においても重要な指導項目となる。

本研究は、交渉会話の評価という一種の事例研究ではあるが、留学生を社会に送り出す役割を担う大学における日本語教育にとって重要な指導の観点を示すことができたと思う。

引用文献

Moran, Robert T. (1985) "*Getting your yen's worth: How to negotiate with Japan, Inc.*", Houston, London, Paris, Tokyo.

喬 曉筠 (2015) 「台湾人日本語学習者のビジネス会話に見られる特徴 — 日本語母語話者の評価から」『一橋大学国際教育センター紀要』第6号, pp.65-78.

ホーソンとポーの短編作品における 女性表象と男性主体

— “The Birth-mark” と “Berenice” を読む —

藤 村 希

本発表では、ナサニエル・ホーソン (1804-64) の「痣」 (“The Birth-mark,” 1843) と、エドガー・アラン・ポー (1809-49) の「ベレニス」 (“Berenice,” 1835) における、女性の身体の表象と主人公である男性の主体の関係を比較考察した。これら二つの作品は、「痣」においては主人公エイルマーが妻ジョージアナの頬にある痣に、「ベレニス」においては主人公でありかつ一人称の語り手であるイージーアスが従姉妹で婚約者のベレニスの歯にと、その部位は異なるものの、いずれも主人公の男性が女性の身体の一部に強く執着し、その一部を身体から取り除くことで女性を死に至らしめることを特徴とする。それは一見、男性による女性の支配を描いたものと見え、実際そのように論じる先行研究もある。しかし、男性主人公の主体と女性の身体との関係は、支配と被支配といった単純な二項対立のものではない。

これら二つの作品を、両作品の書かれ発表された 1830 年代から 40 年代にかけてのアメリカのコンテクストに照らして分析するにあたり、まず、自由・平等という建国の理念の下に抑圧されながら実のところアメリカの国家的アイデンティティを下支えしていた「他者」を恐怖の存在として描くアメリカのゴシック・ジャンルについて、そして、男性を自らの腕一本で身を立てるべきものとするのに対し女性を家庭における精神的役割に限定した同時代のジェンダー規範について、確認した。その上で、「痣」においては実験室、「ベレニス」においては図書室という作品舞台が、男性主人公の知や精神とのつながりを強調する一方で、女性登場人物の身体、

ことにセクシュアリティと相容れない場とされていることを示した。ジョージアナの頬の上の手の形をした痣、およびベレニスの歯は、これら女性のセクシュアリティと結びついており、ジェンダー規範が求める精神性の枠を踏み越えるものである。エイルマーやイージーアスは、その具現であり自らをとらえるものである手（の形をした痣）や歯を取り除く行為に至るのだが、それらが彼らを深くとらえるものであるがゆえに、彼らの行為は彼ら自身の分裂をもまた導くことになる。このように、「痣」と「ベレニス」において、男性主体は女性を抑圧しつつ女性に下支えされているという構造を示しており、女性の身体の一部を取り除くことで主体崩壊に至る。そのような男性主人公を、ホーソーンは複数の視点の導入によって批判的に描き、ポーは一人称語りの操作によって読者に迫体験させていると論じた。

シェイクスピアは英語教材だった！

— 中等学校英語教科書(1886-2016)におけるシェイクスピア受容の通時的考察 —

内 丸 公 平

現在、シェイクスピアは役に立たない英語の象徴のような存在として語られることが多いものの、かつてはそうではなかった。英語教科書にはシェイクスピア作品（リトルド版を含む）が掲載され、学生たちはその物語に触れることができたのだ。英語教育におけるシェイクスピアの歴史的推移を実証的に明らかにするため、本発表では、旧制中学校、高等女学校、実業学校、師範学校など戦前の中等学校、および戦後の中学校や高等学校で使用された国産の検定英語読本に焦点を当て、それらの教科書に掲載されたシェイクスピア作品の推移について考察した。

シェイクスピアの物語がはじめて紹介されたのは1889年に検定合格した、日本人の手による初めての英語読本『正則文部省英語読本』である。その第5巻にラムの“King Lear”が姿を現す。日本人がはじめて編纂した英語読本の教材のひとつとしてシェイクスピア作品が選ばれていたという事実は、戦前の日本の英語教育において、シェイクスピアがいかに重要な作家だったかを物語るものだろう。

その後も英語読本はシェイクスピア関連のテキストを掲載し続け、その総計は159種類に達し、そのなかに総数248のシェイクスピアの読み物が含まれていた。これらの英語読本を検定合格した年に応じて10年単位で分け、各年代の英語読本の総数を分母として、各年代の英語読本におけるシェイクスピアの掲載率を導き出すと、1920年代から40年代にかけて、30%以上の掲載率であったことが判明した。1941年に連合国に対して宣戦布告し、英米に対する敵愾心が高まっていたにもかかわらず、戦中に検定合格した教科書中にもシェイクスピアの評伝や作品が削除されることな

く、掲載されていたことは驚くべきことである。それほど、英語教材としてシェイクスピアが日本の英語教育に根づいていたと推察される。

もっとも多く掲載されていたテキストは、シェイクスピアの評伝であり、現在までの調査では、少なくとも93のテキストが英語読本に掲載されていたことが判明している。作品としては『ヴェニスの商人 (*The Merchant of Venice*)』が多く、そのあとに『リア王 (*King Lear*)』などが続く。『リア王』が好まれたのは、日本人のもっとも重要な道徳的美徳とされた孝行がそこに描かれていたからであり、実際に、編者たちは同作品を孝行美談の物語として再編していたのである(1920年代~1930年代に使用された第2期・第3期の国定国語読本にも同様の翻案を施された『リア王』が掲載されていた)。

一方、戦後の1947年以降に検定合格した英語教科書ではシェイクスピアはどのようなあつかいを受けたのだろうか。たとえば、高等学校用の英語教科書では、1947年から1950年代までは、実に半数以上の教科書にシェイクスピアが掲載されていたことが判明した。その後、1960年代から1970年代にかけて減少傾向が見られはじめる。さらに1980年代から急激な下降線をたどり、2009年版の高等学校学習指導要領で「英語コミュニケーション」が導入されてからは、47種類中1種類の教科書にしかシェイクスピアが登場しなかった。こうしてシェイクスピアは日本の英語教育から追放されていったのである。

しかし、シェイクスピア作品が教材として不適切になったわけではなく、むしろ、彼の作品は人種、宗教、政治的ポピュリズムやジェンダーなどきわめて現代的な問題を扱っているため、世界市民として思考を深めるための教材、つまりシティズンシップ教育の教材として編纂可能であると考えられる。にもかかわらず、教科書の編纂者たちがその可能性を掘り下げてこなかったことはまことに残念だと言わざるをえない。英語が世界言語になっている現在、英米の作家や文化だけが教材になることはあってはならないが、面白い物語は学生の興味をひく、という普遍的な事実を

鑑みれば、平易な英語にリライトされたシェイクスピアの作品は、かつてそうだったように、今日の英語教育にも十分に貢献しうるものと考えられる。英語教育が盛んに議論されている今だからこそ、戦前の英語読本に掲載されていた文学作品を知り、現在を照らし見る。そのような稽古照今の姿勢が今求められているのではないだろうか。

詳細については、内丸公平「シェイクスピアと英語教育——中等学校用英語教科書（1886年-2016年）におけるシェイクスピア受容の考察」『日本英語教育史研究』第33号（2018）：29-58を参照。